



平成30年度
会報第2号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-16

鹿児島県公立小・中学校
教頭会会館県教頭会事務局

Tel 099-226-8268

Fax 099-822-5580

これからの教頭に求められるマネージメント力

～平成30年度を振り返って～

鹿児島県公立小・中学校教頭会

副会長 久永 浩幸

(鹿児島市立郡山小学校 教頭)

3学期始業式の朝、なんと校内に体長五十センチ程度の瓜坊が一頭迷い込んできました。今年は亥年。なんだかいつもより幸先のよいスタートが切れそうな予感がしています。

さて、本年度は学習指導要領改訂に伴う移行期として、道徳の教科化や外国語活動の時間増、プログラミング教育の導入等について研究し、各学校とも急ピッチで教育課程の編成作業を進めておられることと存じます。新たな教育を取り入れていくには、時間と労力が必要ですから、教頭先生方の御苦労を心よりお察しいたします。

11月に行なわれました県教頭会研究大会におきまして、これらの教育課題に関する研究発表が多数なされ、先生方の関心の高さがうかがえました。

特に、小小連携や小中連携、地域人材の活用

務を簡素化や効率化による改善が必要だからです。学校は、限られたスタッフや施設等による許容量が存在します。それを超えた業務が継続すれば、少なからず教育の質に影響することはありません。まして、授業時数が増える状況の中でさらに多岐にわたる教育を行なうのは無理が生じます。これからの学校は、それぞれの教育活動の意義目的をよく吟味しながら、適切に取捨選択していくことが望まれると考えます。BuildとScrap、双方を視野に入れながら、教育課程編成や業務改善に取り組んでいきましょう。

そのためには、これまで連携を密にしてきた保護者や地域の理解を得ることも大切です。これからの学校が目指すものを機会あるごとに保護者や地域の方々に伝え、理解を求めていきましょう。自校区だけでなく、近隣の学校間での情報交換や共有をすることで、教頭間の連携や連帯もさらに深められたらと思います。

このような取組を推進する中で、「どこに力を入れた教育を行なっていくのか」というシンブルな教育ビジョンが各学校で立ちあがっていくのではないのでしょうか。そして、それらを具現化するには、大きな推進力となるべく、私たち教頭のマネージメント力が今後さらに問われることになりそうです。

新任教頭

少しずつ・・・



日置市立日吉中学校

南郷 美幸

本校区は、「せっぺとべ」や棒踊りをはじめとした様々な地域行事が受け継がれ、子ども会活動にも積極的に取り組まれている地域で、まさに歴史と文化が残る学校である。

このようなすばらしい伝統ある学校へ胸躍らせて赴任したのも束の間、すぐに慌ただしい教頭職との格闘が始まり、あっという間に九月が過ぎようとしている。スピード感をもって仕事に臨もうと思うが、多様な職務に追われてうまくいくことが少ない日々である。これまで出会った教頭先生方は、教頭職の大変さを少しも感じさせることなく、仕事をスムーズにこなされ、時には冗談も含ませながら職員との和を作られていた姿を思い出すと、胸が熱くなる。

そんな中、元気で素直な生徒、笑顔で優しく助けてくださる学校長や職員、保護者や地域の方々の温かい支援や協力を受け、いまの私がいる。感謝の念で一杯だ。

「校長を助け、校務を整理し、教育をつかさどる。」はたして私はどれだけ遂行できているのだろうか。また、「一つ一つの仕事に自分の考えをもつてのぞみなさい」と教えていただいたが、私は自分の判断不足や自信の無さから、「校

長先生、どうしたらよいでしょうか」と、常に何を立ててきた。

しかし、この九ヶ月間の試行錯誤の中で、少しずつではあるが、学校内外のことが見えるようになってきた。

一つの物事を進めるには、周りの状況や関係する人たちの思いをよく理解し、その思いを汲み、周到に事前準備を進めることが必要である。そのことをしっかりとわきまえて、今後も人とのつながりや思いを大切にしながら、教頭としての役割を果たせるよう力を尽くしたい。

さわやか君とけやき

南九州市立霜出小学校

室屋 綾

霜出小に赴任しての第一印象は、ピンクに縁どられた三階建ての校舎、「なんてきれいな素敵な学校！」だった。創立一三八周年を迎えた歴史ある学校とは思えないほど、洗練されたイメージだ。

また、正面の職員玄関には、ランドセルを背負った男の子が直立不動で正面をしっかりと見つめて立っている。みんなが「さわやか君」と呼ぶこの銅像は、一九八〇年、百周年の記念碑として建てられたもので、当時の写真を見ると全身金色であったことに驚いた。今年、児童八三名、職員十六名、そしてさわやか君を入れて、ちょうど

百名の霜出小。

学校の合言葉も「さわやか」。朝の活動もさわやかタイム、さわやか漢字、さわやか計算、さわやか読書など。学校生活の中に「さわやか」がなじんでいる。その言葉のとおり、子どもたちのあいさつと笑顔がさわやかな学校だ。初めて会う来校者の方にも、まっすぐ顔を見てあいさつできる子どもたちに、毎日とても癒されている。

そして、校庭の真ん中には大きなけやき。葉の色や量で四季を感じさせてくれる。夏場はいっぱいの葉を茂らせ、子どもたちは木陰でひと休み。いつもきらきらした声がはじけている。「けやき木」「目立つ、ひととき優雅にいる」という意味のシンボルツリー。地域の方や保護者が学校を愛する心が強く、学校応援団として教育活動に参加してくださり、とてもありがたい。飲み会のたびに笑顔の輪、人の輪が広がっていく。

この素敵な学校をなお一層「目立つ、ひときわすくれている」学校にするため、微力ながら自分の持てる力のすべてで、教頭として務めたい。笑顔の輪・人の輪を大切にしながら……。

随想

手を動かすことで

さつま町立山崎小学校

藤崎 光洋

補教に入る楽しみの一つは、子どもたちと直接ふれあえることである。普段は、通常勤務に急かされて、なかなか子どもたちとじっくり話すことができないでいるが、これはチャンスとばかりに、自分なりに準備した「教材」を持っていそいそと教室へ向かう。もちろん、担任が準備したものがあればそちらが主だが、私の教材の中に「ペーパークラフト」をよく使うのだ。別名カードモデル、欧米では古くから盛んで、日本でも江戸時代から「立版古」として親しまれていた。紙に印刷された図形を切り抜いて組み立てれば、建物や乗り物などの模型ができるという物で、二次元から三次元に立ち上げるという図形学習にもなるのだ。現在、ネット上に様々な種類の無料データが掲載されており、その中から子どもが発達段階に応じた物をプリントアウトして使っている。以前、特別支援教育である女子児童に簡単なサンタクロースを作らせてみた。はじめは不器用だったが、いろいろと作っていくうちに熊本城の天守閣を作り上げるまでになった。それに伴い、計算能力や理解度も伸びていったのである。思うに、パズルの

ような手作業をすることは脳の活性化を促し、その他の分野にも波及効果を及ぼしたのだろう。もちろん、個人により向き不向きがあるので一概には言えないが、学習成果の確かな手応えを得ることができた。

さて、定年を迎える身として思うのは、「これは認知症対策にもなるんじゃないか」ということである。時間に余裕が出てきたら自分でデータを作って無料開放し、多くの人々にもペーパークラフトを楽しんでもらえれば少しでも社会貢献になるのではと思うのである。

地域の方々への感謝

湧水町立吉松小学校

朝倉 寛

教頭になって二校目で四年目を迎えた。校長先生をはじめ、教職員、保護者、地域の方々に支えられて職務を遂行できている。教頭になつて感じるのは、周りの方々に感謝することが多いことである。その中でも印象に残っているのは、地域の方々と連携して学校や地域のために活動できたことだ。

前任校は、小規模校で完全複式の学校だった。児童数も少なかったため、今後のPTA活動にも影響が出て、何とかできないものかと悩んでいた。PTA会長や校区長さんに相談し、地域の協力をいただいて「学校応援団」

の組織を起ち上げることができた。

そして、八月。地域にPTA愛校作業の協力を呼びかけたところ、小雨が降る中、たくさんの方々が参加されて、校庭の草刈り機や大型のトラック、高所作業車などを用意してくださり、高木の伐採や普段できない場所の管理作業を行うことができた。とても有り難く、うれしかった。その後の懇親会では、一人一人にお酒をいただいて感謝の気持ちを伝えることができた。

また、市P連研究大会の際は、駐車場整理の協力も地域の方々が「教頭先生からお願いされたら手伝うよ。」とおっしゃってくださった。本当に、感謝の気持ちでいっぱいになった。

現在の勤務校でも、十一月に行われた「豊祭相撲」といった地域行事には、地域の方と保護者の指導のもと、子供たちは学校対抗戦で優勝することができた。今後も初心を忘れず、地域の方々と協力して魅力ある学校にするために、精一杯努力していきたい。「少しずつ・・・」

自由投稿

よか先生に

鹿児島市立伊敷中学校
教頭 松本 眞一

先生方に「よか先生に」なってもらいたい、それが私の心からの願い、教頭としての目標でもある。実は、そのことが先生方の本当の意味での「人生の幸せ」につながると信じている。これは、「教學一如」の考え方にも通じる。ひいては、「よか先生に」学ぶ子供たちの幸せにもつながっていく。自明の理である。

「学校の常識は社会の非常識」、本当に残念な言葉である。しかしながら、学校現場を離れ、一般市民との応対やクレーム対応、県職・市職員の立場の経験則から学校を見ると、やはり、その言葉には納得できる部分もあるから尚のこと悔しい。

だからこそ、私は三つの目指す教師像を掲げた。①学びの楽しさを知っている教師、②時代を見通す広い視野をもった教師、③多様な価値観をもった幅の広い教師」である。いささか大きすぎるか。

この教師像実現のため、私はOJTを大切にしてきた。OJTとは、先輩が後輩に仕事を通して必要な知識・技能等を意図的・計画的に指導し修得させること、それによって力量を育成していく活動である。具体的には、校

務分掌の機能化を図ることだ。そのため、四主任や学年主任に、一流の力をつけることが大切である。各主任は、自分の業務が機能化するよう、一人一人の職員に光を当て、責任をもたせて指導し、育てる。「先輩は後輩を慕へ、後輩は先輩を敬え」の言葉どおり、「育てる」ことは本当の意味で後輩を大切にすることである。

人を「信じ、認め、任せる」いまの私にはまだ程遠いとは十分承知している。しかし、「よか先生に」への歩みを、私はあきらめない。

山路を登りながら

鹿屋市立寿北小学校
小丸 公陸

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」

夏目漱石の『草枕』の冒頭である。教頭職について二年目。私は、この冒頭を学校運営に当てはめ、自らを鼓舞している。自分の立場で考えてみると、およそ次のように捉えることができる。

「正論だけで物事を進めようとすると、壁に当たってしまう。情が深くなりすぎると、思ったことができなくなる。自分の主張ばかりすると、視野が狭くなる。なんと教頭職は、なかなか困難だ。」

夏目漱石は、知・情・意のバランスを取ることが大切であると述べている。学校は、学

力向上や生徒指導等で、様々な課題を抱え、その解決に向けてチーム体制で取り組まなければならない。加えて、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、プログラミング教育の導入、簡素化・効率化・意識化を図る業務改善など、課題は山積している。

それらを「住みにくい」という理由で後回しにするのではなく、バランス感覚を持って取り組んでいくことが重要だ。そして、「住みにくい」からこそ、「住みやすく」なるように考え、工夫していくことが、学校を支える教頭の役割である。

今のところ、物事を大きく変えていけるような力を、私はまだ持ち合わせてはいないが、私は私のできることを積み重ねていきたい。教頭職という山路を登りながら、私はこう考えた。

本の紹介



お勧めできない本

瀬戸内町立油井小中学校

教頭 根釜 文字

『つばさよつばさ』

著者 浅田次郎

発行所 集英社文庫

ずっと本が好きだった。気に入った作家の本を手当たり次第に読み漁るのは、子どもの頃から至福のときだった。

しかし、教頭になって本に割く時間が限られた上に、学び続けなければ今の激動の教育界に身を置くのはえらく困難という状況であり、それならばと仕事関連の本ばかり手取るようになった。いつしか読書は義務と化し、見事に本嫌いになってしまった。

そんなとき、飛行機の機内誌で、浅田氏のエッセイに出逢った。付箋や蛍光ペンの類を持たず、「これは使える!」とかも思わず、ひたすら読みふける純粋な読書。それでいて、コラーゲンだかヒアルロン酸だかのように、カラカラに乾いた心に潤い直接浸透する読書。本好きの心が蘇り、めでたくアミユに直行、本、即購入と相成った。

内容は、氏が忙しい合間を縫って出かける旅の仰天エピソード集。講演先のロンドン、

手に汗握るラスベガスでのギャンブル、変な日本語が飛び交うエジプト、明かされる直木賞作家の日常等々、作者本人が「面白がつて書いている」のだから、面白くない訳がない。ましてや、旅とはほぼ無縁のこの仕事である。

「よし、定年したら…」と、多忙な中でもふと老後の人生に思いを馳せ、夢を持たせ、今日を頑張れるという貴重な一冊なのである。

ちなみにこの本は、『アトム・ファイン!』『ハリわすらい江戸わすらい』の二冊と併せた三部作で、その第一弾である。鹿児島に来て「白熊」をどうにかして食べようと奮闘する第二弾のエピソードは、抱腹絶倒であった。

最後に、ここまで色々と書いてしまったのに、原稿の趣旨に反して大変申し訳ないのだが、超多忙な上に指導に役立つ情報や、自分を鼓舞する内容を心から欲してやまない教頭陣に、この本を勧める勇気を私は持ち合わせない。

ただし、無欲の境地が被害を最小限にする唯一の方法であろうことは申し添えておきたい。

自分を見つめ直す一冊

中種子町立野間小学校

本村 嘉朗

『自分マーケティング』

〜一点突破で「その他大勢」から抜け出す〜

著者 川上 徹也

私を含めて、「あなたの強みは何?」と尋ねられると、意外と「自分の強み?」と考え込んでしまうものです。人には様々なよさがあるはずですが、自分のことになるとつい言葉に詰まってしまう。また、自分の弱点があるきつかけで強みに変わることもありま。自分の弱みや強み、解決のヒントがこの本の池上彰さんの話にありました。

ジャーナリスト池上彰さんは、NHK「週間こどもニュース」のキャスターとしても有名です。しかし、「報道の現場に戻って取材を続けたい」と考え、番組担当の十一年間ずっと解説委員への異動希望を出し続けたそうです。そして、ある日上司から、「おまえは専門分野がないからだめだ」と告げられました。

弱点を指摘された池上さんは、「では、私の強みは何だろう?」と考えました。そして、「専門性がないということは、言い換えると幅広く何でも知っているということだ」と気づく

のです。その後は、どんなジャンルでも解説できる強みを生かし、数多くの番組で活躍するようにになりました。

また、一点突破するための戦術九か条も書かれています。最も参考にした一つ目は、「自分には自分の世界にどっぷりハマり、夢中になる時間を持つようにしようと思いました。二つ目は、「誰かの役に立つことを徹底的に提供する」です。多忙な中ではどうしても自分に余裕がなくなるので、そういうときこそ相手意識を大切にしようと思いました。

皆さんも、ちょっと立ち止まってこの本を手にとり、「自分マーケティング」について考えてみませんか。